

MACが初回分離された症例について臨床的意義の検討

浅田 薫, 吉多 仁子, 所 知都子, 浅井 浩次, 北橋 由紀子, 谷川 信子
(大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター)

目的 当センターでは、抗酸菌の培養は小川培地、MGI培地を用いて行っている。MGI培地を用いることで、*M. avium complex*(以下MAC)の分離頻度が高くなったのではないかと考え、その投薬歴から臨床的意義の検討を行ったので報告する。

対象・方法 期間は2002年7月 - 2004年3月とした。初回分離された7症例を対象とした。そのうちわけは、*M. avium*が4例、*M. intracellulare*が1例、*M. avium complex*が4例であった。培養陽性の頻度別に5種類の分類をした。分類1はMGIに1回のみの症例、分類2はMGIと小川がともに1回の症例、分類3は1ヶ月以内の排菌が小川培地で確認できた症例、分類4は2ヶ月以上半年以内の排菌の確認ができた症例、分類5は持続排菌例とした。また、投薬歴はコンピューター登録を参照とし、分類は4段階で行った。投薬歴1は投薬なし、投薬歴2は1ヶ月間以内、投薬歴3は2-5ヶ月、投薬歴4は半年以上とした。

結果 頻度別例数は、分類1は11例(15.9%)、分類2は11例(15.9%)、分類3は13例(18.3%)、分類4は21例(29.6%)

分類5は15例(21.1%)であった。全体の投薬歴をみると、1は17例(23.9%)、投薬歴2は8例(11.3%)、投薬歴3は13例(18.3%)、投薬歴4は33例(46.5%)であった。このうち、分類1の11例中5例(45.5%)、分類2の11例中6例(54.5%)についての患者には投薬がされていた。また、分類5にはすべての症例に投薬歴があった。

考察 今日、1976年の非定型抗酸菌症研究協議会による非結核性抗酸菌症に対する診断基準が最も広く使用されており、基準では1ヶ月3回で100コロニー以上の排菌が条件とされている。一般的にMGIは感度がよいため、この培地のみからの非結核性抗酸菌の検出は有意と判断されない場合がある。しかし、今回の検討ではMGIのみでMACが一度しか分離されなかった症例中にも約半数が投薬を受け、改善していることから、MGIのみで陽性の症例でも起炎菌として取り扱うべきと考えた。

連絡先：0729-57-2121(内線2577)